

ゆうかり放送委員会提供
ゆうかりに乾杯
 第125回放送の概要 (2017年9月23日放送)

パーソナリティ
 たろう
 (佃 由晃)
 なか
 (中嶋邦弘)
 かりん
 (妹尾優香)
 あな
 (岸本幸恵)



ミキサー
 門ちゃん
 (門田成延)

会計
 小山俊則

相談役
 わだかん
 (和田幹司)

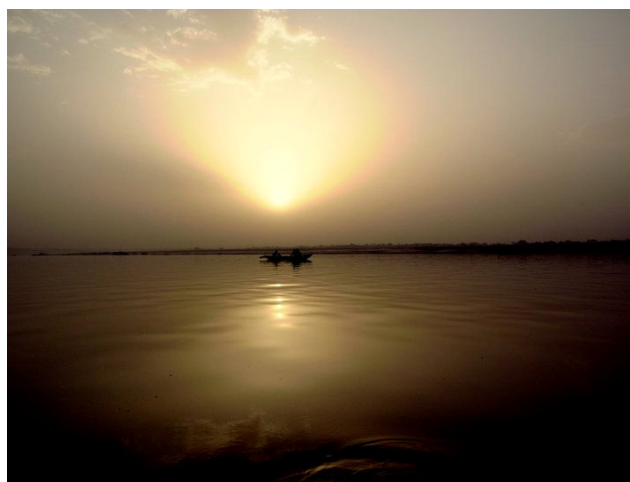
1. ゲストコーナ (1) 写真家、ダンスボックスPRディレクター、下町芸術祭事務局長

岩本 順平さん

(1) 長田との関わり (岩本さんの3つの肩書きについて)

写真を撮り始めたきっかけは、10代の終わりにインドへ行きその時写真を撮り始め、撮った写真がきっかけで写真館のアシスタントとなった。写真は今の仕事のベースになっている。

2014年知り合いを通じて、ダンスボックスがPR担当を探していて、問い合わせたところ直ぐに来て欲しいと言われ参加することになった。ダンスボックスの事務所、劇場は新長田大正筋商店街再開発ビル、アスタくにつか4番館の4階にある。岩本さんの出身は加古川で、2015年加古川から長田、駒ヶ林に移住した。

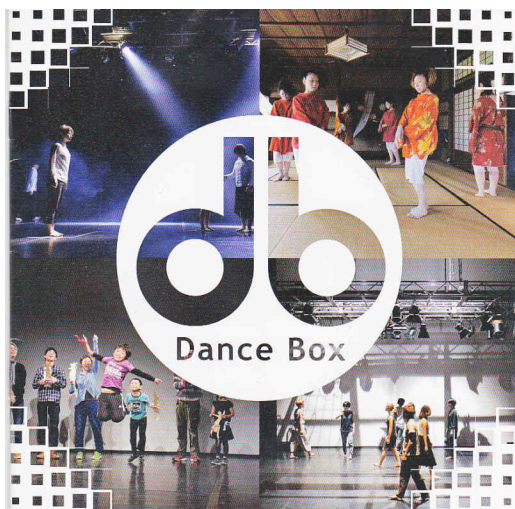


下町芸術祭には、ダンスボックスに関わり始めたとほぼ同時期の、2014年末から新長田アートcommons実行委員会事務局長として参加し、2015年10月末から2週間下町芸術祭を開催した。長田区外からきてすぐに下町芸術祭を担当するのは難しかった。長田に引っ越した理由は、地域住民からするとイベントだけして出ていくんだろうとすごく言われ、それなら住民票を移そうと思った。駒ヶ林は下町で昔から漁港のある漁師村で、地域の空き地の再開発も動き始めていたので、その場所に住むことがすごく大事と思った。下町芸術祭は震災から20年経過した2015年に始め、いろんなプロジェクトが終わっていく中で、ダンスボックスも新長田に移って8年目で活動が根付いてきてきた面もあり、地元も芸術を通して若い人に来てもらいたいという気持ちがあり、地域の活動を活発化するため下町芸術祭を始めることができ

た。これまで20年間積み重ねてきたことを発展させたのが下町芸術祭になった。

(2) ダンスボックス

ダンスボックスが長田に来た理由は、もともと大阪のフェスティバルゲートでコンテンポラリーダンスのアーティスト的な活動をしていたが、閉鎖で劇場がなくなり、神戸市から再開発ビルにきてほしいと誘致された。アート性の高いものを打ち出すことを軸にしていた。新長田は商業エリアというより住宅とすごく近い場所にあるので、地域の人とどうやって関わられるのかを移ってきた当初から考えていた。神戸野田高校と協力したり、商店街でパフォーマンスをしたり、劇場から外に出て行くことが多くなった。地域の中で来ていただくだけでなく、地域の中でダンスを入れ込んでいくこと、外に向いていることが大阪の時より増えている。

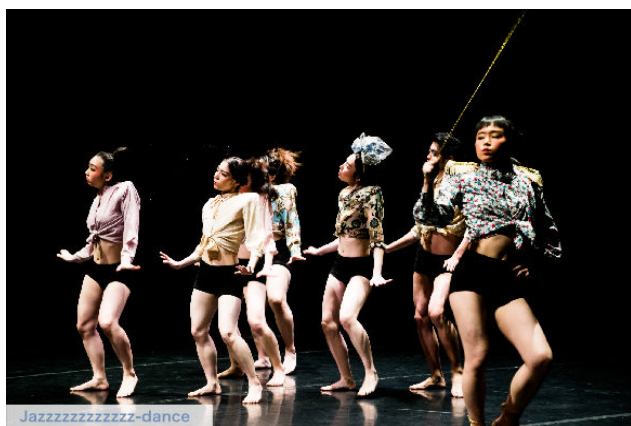


ダンスボックスの特徴は、扱っているダンスがコンテンポラリーダンス（同時代的なという意味）というアート性の高いダンスで、まだカテゴリー分け出来ないダンスで、見慣れているヒップホップやジャズ、クラシックバレエのような作品もあるが、そうではないものが沢山あり、初めてみた人はわかりづらいと言う。最近では土屋太鳳さんや森山未来さんの映像をよくみかける。ダンスボックスでは振付家、演出家を招致して公演の作品作り、一緒に小学校に出向きレクチャーをしたり、地域の祭りで一緒に踊ったり活動している。

国内ダンス留学は、プロを目指す振付家、ダンサーを対象に、8か月間新長田に引っ越してもらい、6～10名くらいの振付家の作品に出たり、ワークショップで振付家、演出家の考え方を知る。今年度は6期目。コンテンポラリーダンスは90年代から大きな動きがあるが、次の世代を育て見つけ、この劇場のある場所で日々稽古をし、成長してもらうことで、神戸からダンスが発信されていく状況をつくりたい。



神戸の劇場は元々ライブハウスなので、スタンディングで250名、ダンスを見るときはひな壇を組んで見やすくするので椅子を入れて100~120名くらいの収容人数になる。公演は、今年は劇場と外部を合わせて20本程度、1本あたりの公演日数は2~3日ほどで年間40日程である。入場料は高い金額ではなく、文化庁や国際交流的プロジェクトでは国際交流基金、今年はアメリカ大使館などから支援を頂いている。ダンス留学の授業料は安く抑さえ、全国からトップレベルのアーティストを招聘している。例えば今回ダンス留學生の公演で振り付け、演出を担当された山崎広太さんは、ニューヨークベースで活躍し、ニューヨーク舞台芸術批評家の賞を2回ほど受賞されている。コンテンポラリーダンスは現代アートの一つであるので、もう少し自由に感じてもらえたら見ていて面白いと思う。分かるか、分からないか、ということではなくて、感じるということを大事にもらい、多くの人に楽しんでいただきたい。ダンスボックスを運営している常勤は5名。



2. ミュージック：「空へ」アーティスト 岡田修

曲は、ワールドミュージックインターネット放送協会（WMI BA）より提供いただいた、津軽三味線演奏家 岡田修さんの「空へ」です。

3. ゲストコーナー（2）

（3）下町芸術祭（事務局長）

第1回目の下町芸術祭では実行委員会の地域のメンバーが企画を持ち寄り、自分たちのやりたいものをプログラムを作ってやっていく方法をとった。延べ来場者数は2週間で68000人、参加アーティストも100人を超え盛り上がった。2回目をやるときに、もう少し地域のことを深く掘ることを考えればもっと地域にとっても面白いことになるし、見に来てくれた人にとっても何かを持って帰ってもらえる企画になるのではと思った。下町芸術祭を10年20年と続ける企画にしたいとの思いが最初から皆にあったので、深めることに取り組みたいと思い、今回は実行委員会がみんなで作るというより、ディレクターを選びその人の視点でプログラムしプロジェクトを作ってもらうことにした。

今年のメインテーマは「境界の民」。長田で下町芸術祭を行うときのこの町の特徴を考えると、象徴的な場所として駒ヶ林を作品の展示会場に選んでいるが、1回目の芸術祭でみなさんに評価していただいたのは、そこは細い路地に物干し竿がかかっていて今も使われており、干している洗濯物まで作品に見え、どれが作品でどれが日常かが面白く、自分たちの日常と他の人の日常がかぶっている。プライベートなスペースとパブリックのスペースがかぶっているところは、ある種の境界があやふやになっている。また移民の人が多い歴史の中で近づくことだけではない理解の仕方、お互いにある種の違いをわかっているからこそ受け入れあえる距離感、境界が見えているからこそ守れる相手のパーソナリティ、そういうのもあると思っている。



そのようなことが地域のこととしてあり、社会の中ではLGBTの問題、なくなったかと思いきや残っている同和問題、京都崇仁地区再開発、釜ヶ崎エリアの大阪万博誘致のための再整備、LGBTで言えば認めることでボーダーを作りそこから更に外れていることは認めない、ある種決めてしまうことの怖さ、理解を示すことが本当に理解していることなのか、受け入れていることなのか、色んな境界が今整備されていこうとしているんじゃないかという違和感を感じる。

そのような中で長田の人は境界を認知しながらも時々越えたり時々境界を認知して避けたり、境界を行き来するようなある種次の時代を生きていくような知恵を持っているのではないかと、そのようなことから「境界の民」をテーマにした。この素晴らしいテーマがどのように実現されるかである。各ディレクターがどのような提示がされるのかはまだわからない。それは見に来てくれる人、町の人から新しい何かが芽生えていく。

5人のディレクターの取り組みは：

①現在駒ヶ林で活躍している小國陽佑さん（NPO 法人芸法 理事長）

～「Dialogue on the Borderline」～

古民家や空き家を使った若手の作家の展示を考えている。そのプログラムは2週間ほど駒ヶ林に住み、滞在制作で作品を作ってもらおう。外から来た人が新鮮な目で町を見るとどういう風に見えるのか、面白さをどう捕らえるのかを試したい。

古民家や空き家については、第1回開催後空き家に関してカフェをやりたい、ゲストハウスをやりたいなど問い合わせが増えた。しかし応えられる物件がなかった。町の人にとっても、こうやって空き家の活用が出来る、他人から見るといい物件なのだということを知ってもらえればいいと思い、また沢山の人がきたのでまちからも評価され、「空き縁ネット（スタジオカタリスト松原永季さん）」の活動が始まった。

②横堀ふみさん（NPO 法人 DANCE BOX プログラムディレクター）

ダンスボックスが今まで何回かやっている KOBE-Asia Contemporary Dance Festival をやること

を考えている。今年のタイトルは「新長田にあるアジア、家族の系譜より」で、新長田はアジアから移住された方が多く、その人たちが移動してくる間に色々な記憶を持って移動してきており、それが子供たちに継がれ、言語化しないが体の中にある記憶があるのではないかと横堀ディレクターは考えた。韓国の方が行く高齢者介護施設で韓国民謡がかかった時に踊りだす、音に対して体がダンスを覚えていることを見たときに、この人たちの体の中には何があるのだろうか、そういうところを掘り出したいと思った。その考え方の基に、いくつかのダンスのプログラムを作家にお願いしてやっていくことを考えている。実際の上演は劇場、ふたば学舎、商店街、古民家で行う。

③木ノ下智恵子さん（アートプロデューサー、大阪大学21世紀懐徳堂准教授）

森村泰昌「下町物語プロジェクト 2017~2019」

近くにある使われなくなった保育所で、現代美術家の森村泰昌さんにやっていただくプロジェクトは、「下町って何なんだろう」を考えたときに、今下町といわれている場所は、東京オリンピックの時に開発された、大阪万博時に開発された場所で、今再開発した場所は将来下町といわれるかも知れない。下町を構成するものは何か、そこから下町の良さ大切さが見えてくるかもしれない。それを3年間かけてプロジェクトとしてやろうと考えている。保育所の中に、町で採取した音、新長田でもものづくりしている人の作品と、森村泰昌さんの作品を置くことを考えている。保育所は構造上こども向けに小さく作られているので、それが下町の路地に見えるのでそこで何が起きるかが今は想像できない。ある種の非日常が保育園にはみられる。

④服部滋樹さん（プロダクトデザイン事務所 graf 代表、クリエイティブディレクター、デザイナー）

「瀬戸内経済文化圏 OPEN SUMMIT」

下町芸術祭を始めるときに、助成金がなくなっても継続したいとの思いが強くなり、そのような思いを持ったプロジェクトは各地で行われており、今回は「瀬戸内経済文化圏」という概念を作り、そのオープンサミットをやろうと思っている。瀬戸内海11府県で企画、活動している人を呼びトークイベントを行う。すでに実施したプレトークでは、大阪・中之島でプロダクトデザイン事務所 graf 代表で今回のディレクター服部滋樹さん、そして神戸市のクリエイティブディレクター、山坂さん、天宅さんをお招きし、長田で9月2日にプレトークをやり、多くの人に来ていただき感心の高さを実感した。



瀬戸内経済文化圏 11 府県のメンバー

神戸という場所は西に向くことはなく、大阪、京都 vs 東京ということで考えることが多いが、瀬戸内のゲートシティである。神戸が西を向いたときにいろんな資産があるし、高速道路の発達でなくなったが元々海運が活発で、もう一度観光を含めた航路を復活させる動きがある。さまざまな大きさの規模の事業を地域で継続していける人が集まり、それぞれが工夫していること考えていること、商品も沢山あるので「瀬戸内」というブランドで売り出すことを考えていけたらいい。森村さんのプロジェクトは3年である

が、このプロジェクトは11年かけて各都市でサミットをしていきたいと考えている。今年はその1年目。瀬戸内国際芸術祭は外国人からの旅行者も多く連携して広げていきたい。

⑤ 下町芸術大学

下町芸術祭の期間前から始めている下町芸術大学は、座学として長田のこと町のことを学んでいくもので、アートだけではなく戦後の都市史を研究している神戸大学の村上しおりさん、多文化共生について、日本で外国人の居住率1,2番に高い団地の運営をしている早川秀樹さん(多文化まちづくり工房代表)など、多面的に町を深く掘っていくプロジェクト。下町芸術大学も次年度以降継続していきたいと思っている。我々の知っている町は一面的に見ていたことがこのプロジェクトを通してわかってきた。

今後の予定としては、10月21日の「宮澤賢治と農民芸術概論」大島丈志(文教大学 准教授)は宮澤賢治の有名な著作について、これは誰でもみんなアーティストだを初めて唱えたもので、現代ではどうかを掘り下げればと思う。また10月29日には、その頃制作中のアーティストの制作課程を見ることが出来るバックヤードツアーを計画している。詳しくはWEBサイトをご覧ください。



下町芸術祭 2017 は、11月3日(金)~25日(土) 月曜日休業、11時~17時です。展示場所は駒ヶ林町で、各イベントは新長田エリアに散らばっているので、WEBサイトで確認してください。

オープニングイベントのKOBÉ-Asia Contemporary Dance Festivalの中で、インドネシアから振付師ジェコ・シオンポを招聘、ヒップホップとインドネシアの民族舞踊をミックスした作家です。その方の指導で100名の方と各商店街を回り、アニマルポップというダンスを踊ってもらいます。一緒に踊ってもらえる方(素人の方OK)を募集しています。ダンスグループの名前は、「アニマル・ポップ・ファミリー・コウベ」です。

インドネシアのジェコ・シオンポが活動している場所では、子どもから爺ちゃん婆ちゃんまで踊れる100人のアニマル・ポップ・ファミリーがおり、今回その神戸版を作ることにした。クリエーション期間を3週間とり、10月初めにジェコが来神し、国内ダンス留学6期生及び地域の方と一緒に踊れるようにしたい。参加希望者はダンスボックスのWEBサイトをご覧ください。年齢の上限下限はありません。インドネシアの民族舞踊で狩に行く前に動物になりきって踊るものがあり、その踊りとヒップホップを混ぜたものです。日本では上演したことがあるが地域の方と一緒に踊るのは初めてである。

5. 地域瓦版

神戸開港150年記念「港都KOBÉ芸術祭」が9月16日(土)~10月15日(日)(30日間)開催されています。開催テーマ「時を刻み、豊かな広がりへ」です。神戸港、神戸空港島で、港湾施設などに展示さ

れた作品を、アート鑑賞船に乗船して、神戸の街並みと六甲の山並みを背景に、鑑賞。ポートルライナー沿線や各ターミナル施設を会場にしての展示もあります。

ダンスボックスは、鑑賞船でパフォーマンス「ダンスの天地」を国内ダンス留学の1～5期生が披露します。振付演出は、紅玉（ダンスボックス大谷代表）です。

岩本さんは最近結婚され地元の駒林神社で挙式、新長田のふたば学舎（旧二葉小学校）の講堂で 250名の盛大な披露宴を挙げられました。



国内ダンス留学卒業生出演！



ふたば学舎での岩本夫妻披露宴

ゆうかりに乾杯の過去の放送音声と文書化した放送概要は、下記URLで視聴いただけます。

<http://yukari.hyogo.jp/>